

「強いられる死～自殺者三万人超の実相～」を読んで

年間自殺者数が10年連続3万人を越えている。

今年も昨年秋からの100年に一度といわれる経済不況から、自殺者数は増えているのでないかと云われている。

自殺というとなつて自己責任論で論じられる傾向があるが、経済不況というような社会背景が自殺者数増の一つの要因と推測されるなら、自殺予防の方策もあろうということになり、国も自殺予防策を次々打ち出してきている。

こうした折、新聞書評で「自殺することを、僕たちはつい詩的に『自ら死を選んだ』などと言ってしまう。本書の読了後は、それがいかに無神経で、残酷で、傲慢な言い方なのか、苦しみとともに思い知らされる。死を選んだ？冗談ではない。選ばざるをえないところまで追いつめられたのだ。いや、そもそも『選ぶ』という自発的な行為で語ってしまうからこそ、一方的な自己責任論が跋扈（ばっこ）してしまうのでないか。」が目にとまり、「強いられる死～自殺者三万人超の実相～」を購読した。

著者はジャーナリストであり、パワハラ、過重労働、多重債務、倒産、いじめ、閉ざされた世界（学校、自衛隊）、モビング、等の側面の自殺者の各実相事例の書であった。

著者が「あとがき」に「仕事を引き受けたことをこれほど後悔したのは初めてだった。実際に取り組み始めたら、苦しくてたまらなくなかった。」と記しているように、読んでいてこれ以上読みたくないと思う程の絶望感の物語の事例の数々を通して自殺を「社会的に強いられる死」という視点からの書であった。

また、自殺の問題の背景には現実社会の色々な矛盾があるようであり、その矛盾と向き合い「明日は今日よりもよくなると信じよう」と、「自殺などしなくてもいい社会にしよう」と活動に取り組む人々や機関（NPO等含め）を、書の後半に「絶望と、それでも、これから」と章立てて紹介し、更に、こうした機関の連絡先の一覧表までも付帯されていた。

それにしても、本書の事例のパワハラ（上司による追いつめ）、モビング（職場組織による追いつめ）のような不健全な社会構造の実像を知ると、背筋が寒くなる。

やはり、「ノー」と云えることが保障されている組織、社会（HP「雑学 BN」の随想等関係（I）、1988.「ノーの保障」：参照）こそが、健全な組織、社会ということではないだろうか。